

関東大震災がきっかけに

（二）で、行商の歴史について、簡単に振り返っておこう。

印西とその周辺地域における行商は、実は大正12年に起きた関東大震災をきっかけに始められた。この時農家の方々は、被災した親戚を見舞うため、背負ったカゴに野菜や米をたくさん詰めて、それも歩いて東

京に向かったのだそうだ。東京に着くと、「お金を払ってから野菜を分けてくれないか」と言う人の多いこと。それからというものが、今の常盤線の土浦〜我孫子、成田線我孫子支線の下総松崎〜湖北の駅前には毎朝市が出るようになり、多くの農家さんが東京へ行商に向かった。



大勢の家族が頼りにする、ばあちゃんの中。行商の女性たちの強さは「母」の強さ。

ドコズンドコ！ 小林 <2>

関野 唯 (イラストも)

しかし行商で背負うカゴ、重さが半端ではない。平均で行きのカゴは60キロ、中には100キロを超えるカゴを背負っていた人もいたというから、体格の良い成人男性を背負って歩くようなものだ。

農家のお嫁さんというのは、サラリーマン家庭に育った私にとっては理解しがたいほど家での苦労が耐えないもので、朝から晩まで家族の為に働き、自分で自由にお金などほとんどなかったぞうだ。だから行商で日銭を稼いでいることは、何より自信になった。そして、家族からも立派な稼ぎ手として、認められるようになったのだ。

ピーク時の昭和35年前後は、小林駅を利用する人だけで600人、周辺地域の行商人の総数は数千人に膨れ上がった。

筑波おろしに鍛えられた根性は誰にも負けない

行商人の女性達は、当時びっけり仰天した車掌さん新聞で『筑波おろしにさらは担架を持ってきたが、彼されて育った根性はどこの女は車掌さんにカゴだけ地方の女性にも劣らない』持ってもらって、家まで歩いて帰ったぞうだ。

ある人は、小林朝市で買出しをして東京へ売りに出た後、湖北まで戻ってきて野菜を買い足し、また東京へ売りに出ていたという。また朝市で野菜を行商人達に売った後、自身も行商に行く人もいた。

こんなエピソードもある。帰りの列車の中、一人の行商人の女性がトイレからなかなか出てこない。仲間が心配していると、トイレから出てきた彼女は前掛けに生まれた赤ん坊を包んで抱いていたのだ。いかと私は感じている。

カネ啜えて帰ってくる ばあちゃんにはかなわない